



広く深く学ぶために

【付記】

資料・エピソード等



(1) 地上の樂園

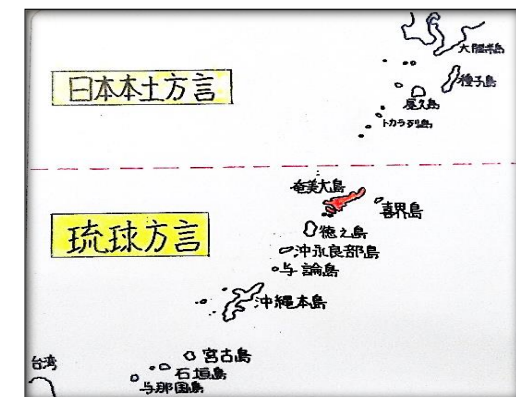
を夢見て ブラジルへ

(2) 第二の与論を目指して 口之津・大牟田へ

(3) 大島中学再建そして奄美の教育の礎に 龍野定一先生・奥田愛正先生

(4) 戦後の教育復興のため命がけの密航

(5) 奄美方言の歴史と音韻の特徴

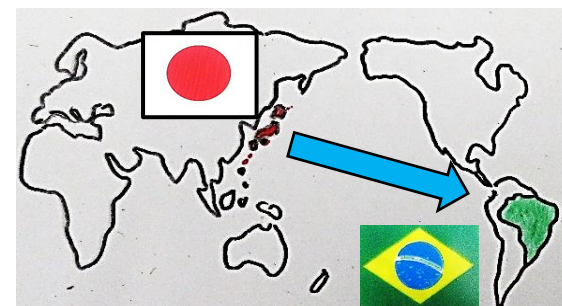


付記【シマ（奄美）の歴史】地上の楽園を夢見てブラジルへ

宇検村湯湾に伯国橋（ブラジル橋）がある。これは、奄美が日本復帰した昭和28年12月にブラジルに移住して
いた宇検村出身者59名から、「戦中戦後の郷土の復旧のために」と贈られた義援金で造られたものである。その
義援金は当時のブラジルの平均月収の200か月分以上の大金だった。湯湾集落でこの義援金の使い道を協議し、
主に「①集落内の橋の建設 ②老人会へ寄付 ③学校へ寄付」になった。戦時中、宇検村湯湾の大半が米軍の空襲
で焼失し橋も破壊された。簡易な橋は大水で度々崩壊した。生活に必要な頑強な橋が急務だった。長さ5mほどの
小さな橋であるが、集落初のコンクリート橋で、住民の生活利便に大きく貢献している。出身者らの「熱い郷土愛」が伝わってくる。

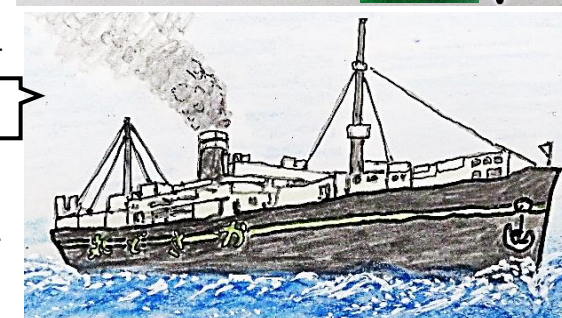


1908年（明治41年）、地上の楽園を夢見て、日本からブラジルへの移住が始まった。当時のブラジルは奴隷制度が廃止され、
コーヒー農園などの労働者が不足していた。また、日本も経済危機で農村が困窮しており、政府も大規模な移民を奨励した
のである。移民たちは広い農地で開拓に燃えていた。しかし、現実には想像を絶する過酷なものだった。はじめ「コロニー」と
呼ばれるコーヒー農園の契約労働者として雇われるが、不便で不衛生な生活環境、早朝から夕暮れまでの長時間重労働と、
極度な低賃金などで日本からブラジルへ渡る際の船賃などの費用返済も、予定の1年よりも長い5年以上かかり、夜逃げする者
もいた。

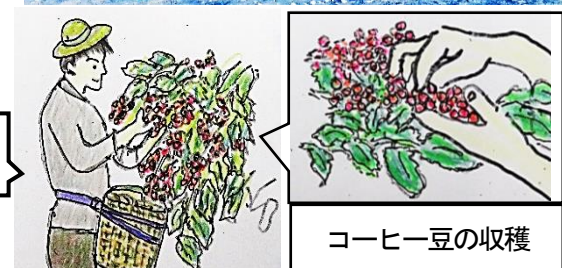


しかし、ここから日本人の崇高な道徳心（勤労勤勉誠実共助等）が発揮される。移民たちはわずかなお金を出し合い、地主
のコーヒー農園を借りる「請負耕作」や、未開の土地を借りコーヒー栽培をする「借地耕作」などに挑戦していった。そして
集団で農耕機械を購入し、日本から持ってきた米や豆、野菜果物栽培を始めたのである。さらに養鶏なども手がけ、その糞尿
を堆肥として活用する有機農法を始めるのである。これは、コーヒー栽培が中心で家畜は放牧に頼る当時のブラジルの人々の農
業からすると画期的で効率的な農法だった。

移民船「笠戸丸」



コーヒー豆収穫は家族総出の労働だった。



やがて、この農法は日本人移民たちからブラジル農民たちに伝えられ、ブラジル全土に波及し、日本人の優れた農業技術と

・誠実などの崇高な道徳心がブラジルの人々から尊敬の念を持って認められたのである。そして、日系2世3世の代になると、産業界・政治界・教育界・医療界などにも尽力貢献し、今日の日本とブラジルとの信頼と友好の礎（いしずえ）となったのである。

「借地耕作」のため未開の土地を開墾する移民たち

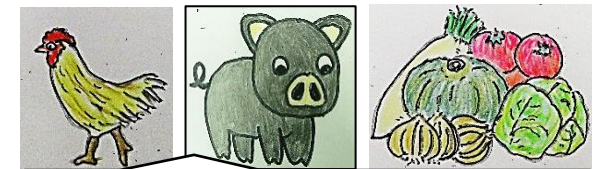
ブラジル移住の応募資格には、①「身体強壮で品行方正で現に農業に従事している者」 ②「夫婦と12歳以上の子ども、若しくは夫婦いずれかの親族で満12歳以上50歳以下の者を加えて3人以上であること」、そして「一攫千金を夢見るのではなく、今後は永住的基礎を造り、利益を得るとともに、ブラジルのためにも利益となる仕事を興すこと」と記されている。ちなみにこの時代の日本からブラジルへの渡航費用は一人200円ほどで、それに移民会社への手数料や諸経費を5人構成家族で計算すると軽く1000円（現在の価格で約400万円ほど）を超える。貧しい多くの移住家族は、自己所有地や家屋を売却し、親戚や友人から借金をして渡航費用を工面したと推測される。また、移民会社が渡航の後の労働賃金からの返済を条件に、渡航費の立て替えも行っていた。まさに「ブラジルに骨をうずめる」覚悟の移住だった。

特筆されるのは、宇検村からのブラジル移住者が人口の割に多いことである。1918年（大正7年）の54人を皮切りに昭和14年の4人まで計70家族439人も移住している。その主な理由として2つ推測される。一つ目は、当時の宇検村は農家一戸あたりの耕地面積が奄美大島の中では最も狭いが、一世帯の人口は最も多い自治体で、人口圧は極めて高い状況にあった。村内には生活が苦しく海外移住を考えていた農家が多かったと思われる。2つ目は村（役場）が書類作成が苦手な村民のために、旅券申請や渡航証明書発行などの煩雑な申請手続きを仲介してくれたことである。渡航手続きに役場が介在することで、熊本に営業拠点のあった移民会社も、奄美で出張業務することが省かれたこと。また移住希望者も不得手な書類作成が省かれ、集団移住形態で情報も得やすく、心理的な負担が大幅に軽減されたと思われる。まさに「官民一体の移民送出システム」だったのである。

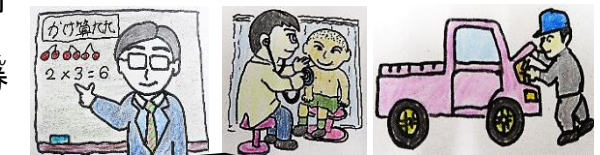
【参考文献：「宇検村誌」（宇検村） 「宇検村ブラジル移民100周年記念誌」（宇検村教育委員会）】



移民たちは日本式の米作りを始めた。



移民たちは養鶏・養豚・野菜作りも始めた。



移民たちの2世3世は各方面で活躍する。



付記【シマ（奄美）の歴史】第二の与論を目指して 口之津・大牟田へ

1898年（明治31年）、与論島を猛烈な台風が襲った。島の真ん中まで潮風が吹き荒れ、サツマイモの葉が黒こげになり、ほとんどの民家が吹き飛ばされ、頑丈な校舎も倒壊した。干ばつも続き、食べ物もなくなった。さらに伝染病も大流行し死者が続出した。与論島崩壊の危機だった。

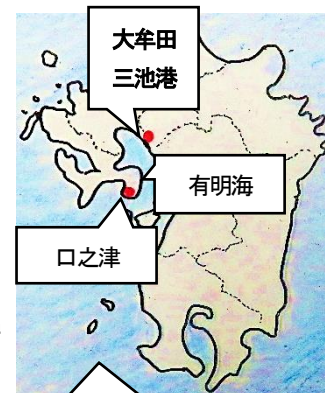
この危機打開のため、上野應介戸長（町長）は、鹿児島県庁や大島支庁に救済を求めた。その頃、県庁と支庁に三井三池炭鉱が労働者募集をしていた。三池炭鉱のある福岡県大牟田からの石炭運搬には、有明海が浅海で船積みできなかった。そこで、長崎県口之津まで団平船（幅が広く底を平たく頑丈に造った船）で石炭を運び、沖に停泊している運搬船に「ヤンチョイ」と呼ばれるリレー方式で積み込んでいた。その沖積み人夫を求めているのである。

与論島の危機を救う道はこれしかないと考えた上野戸長は島中に応募を呼びかけた。しかし、募集に応ずる者はいなかった。極度の生活苦とは言え、生まれ育った島を離れる寂しさ、異郷の地での生活不安寒さへの不安などで臆するのは当然だった。そこで上野戸長は自分の娘婿の東元良を移民団団長にし、二人で精力的に移民募集の説得にあたった。当時、東元良は25歳。役場職員だったが、職を辞し島民を救い第二の与論を建設する覚悟だった。二人の熱意で、子どもを交えた13歳から30歳くらいの若者たち男200名、女40名の総勢240名の移民団が結成された。1899年（明治32年）2月、南国与論とは言え、北風が肌にしみる茶花港で大勢の見送りの人々と水杯を交わし第1回目の移民団が出港した。

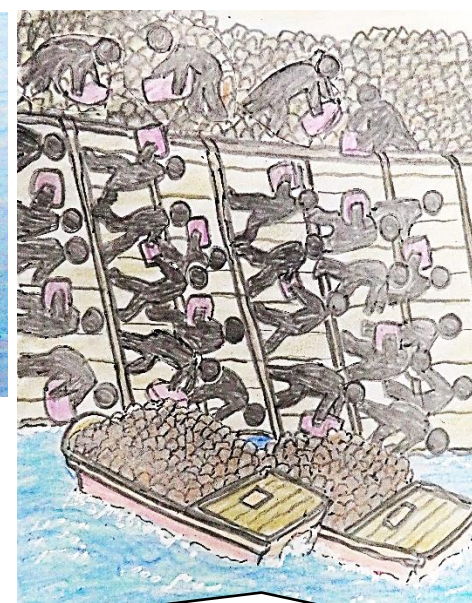
長崎県口之津での生活は過酷なものだった。与えられた与論長屋は一棟だけで、大半は近郊の農家の納屋に分宿した。しかも仕事は長時間の危険な重労働だった。特に外国船入港の際は3日間昼夜の石炭積みは度々だった。そのうえ極端な低賃金だった。現地の人夫から出生地や方言を卑下される屈辱も受けた。望郷と後悔の念が移民団の



台風・干ばつ・食料不足・伝染病・餓死で与論島の危機



はじめは長崎県の口之津へ移住し、その跡、大牟田三池へ引っ越した。



【沖積み：想像図】団平船で大牟田から口之津まで石炭を運び、沖合の石炭運搬船にリレー方式で積み込んだ。重労働だった。

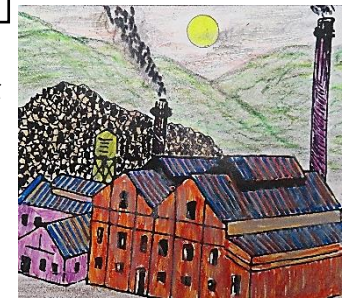
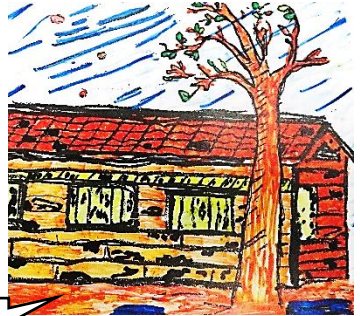
こころ うずま 心に渦巻いた。そんな時、与論移民団は夜に集い、酒を酌み交わし島唄を歌い語らい、団結し、苦難に耐えた。

その後、与論の戸長を勇退した上野應介が新たな移民団を引率して口之津へ移住して来た。そこで上野應介は会社の移民団への待遇の劣悪さに驚愕憤慨した。東元良と共に会社に対し、「重労働に見合う賃金にせよ。」「長屋を建て増しせよ。」「子どもの教育を保障せよ。」を訴えた。そして「これができなければ全員与論に帰る。」と迫った。この要求が受け入れられて、宿舎も改善され学校に通えるようになったが、まだまだ地元人夫との待遇格差は大きかった。

粗末な与論長屋（想像図）

1910年（明治42年）、大牟田に三池港が完成すると仕事も口之津から三池が中心になった。引っ越しか帰島かの議論もあったが、移民団428名が三池に引っ越した。これが今の三池第二与論村の始まりとなったのである。しかし、劣悪な環境に変わりにはなかった。地元人夫が同じ作業を請け負い、常に作業条件のよい仕事を先取りした。日給は地元人夫が40銭で与論移民は28銭だった。そして口之津時代同様、移民団の新生児が増加することや、与論島の歴史や風習などが卑下され偏見の眼差しを受けた。そんな中、移民団の若者たちが「元組」を結成し、知恵を出し合い作業の効率化を上げていった。また、地元人夫からの横暴に団結し対抗することもあった。そうして、移民団は「誠の心」をもって、互いに励まし助け合い、壮絶な苦難を乗り越え、移民2世3世の代には各方面で活躍する人材を輩出し、第二の与論を建設していったのである。

与論島に「♪打ちじゃしよりじゃしより誠打ちじゃしより 誠打ちじゃしば サヨサ 何ばじかちゅんが何ばじかちゅんが♪」という歌がある。これは「何事にも（人にも）誠心誠意尽くしなさい。そうすれば（たとえ失敗しても）何の恥ずかしいことはない。（道は必ずひらけるから）」という意味である。想像を絶する幾多の苦難に耐え、乗り越えた移民団もまさにこの心境だっただろうか。



低賃金のため、子を背負い夫婦で働く者もいた。

【当時を知る人の証言（与論町誌から抜粋要約）】

仕事の合間に付近の山畑を耕作して、さつま芋を作り常食にしていました。子ども達は毎日、海や山をかけ回り遊び、汚れたままの着物で、親も子もごろねしていました。与論の人たちは、24時間も仕事をさせられるし、ひどい時は3日間連続という時もありました。疲労がひどくなると、本船のデッキの上に眠らせることもあったが、満船するまで休憩が与えられませんでした。過労のため作業中にぶっ倒れる人もずいぶんいました。

入港のない夜（作業のない日）は、わらを抱えて集まり、作業のわらじを作りながら、三味線や太鼓でにぎわい、島唄を唄って苦労を慰め合っていましたよ。会社から主食（芋7分米3分）が配給されたが、塩・味噌・薪などは通帳で購入していたので、残る賃金はほとんどなかった。

【参考文献】「与論町誌」（与論町） 「郷土の先人に学ぶ 東元良・上野應介編」（大島教育事務局） 「与論島を出た民の歴史」森崎和江 川西 至（葦書房）
※本文中のイラストは、平成10年度与論町立茶花小学校学習発表会での4年生たちの劇「第二の与論を目指して」で児童が作成したものです。

付記【シマ（奄美）の歴史】大島中学再建そして奄美の教育の礎に 龍野定一・奥田愛正先生

おしまこうとうがっこう せいもんよこ たつのていいち おくだあいしょう 龍野定一先生と奥田愛正先生の胸像が並んでいる。龍野先生は、1889年（明治22年）徳之島亀津に生まれる。亀津尋常

小学校高等科を首席で卒業後、鹿児島二中（現：甲南高校）に進学。在籍5年間を首席で通し、「月謝免除」の恩典を受ける。そして、広島高等師範学校

（現：広島大学）に進学。文武両道で勉学に励みつつ、剣道師範の免許も取得する。卒業後、県内外の教育職を歴任し、大正13年、旧制大島中学

校（現：大島高校）に若干35歳にして校長となる。

龍野定一先生（左）と奥田愛正先生（右）



当時の大島中学は、学力低迷と生徒指導の問題が多発する「荒れた学校」だった。その再建を託されての大抜擢だった。龍野校長は、まず、自分の教育理念である「厳訓無処罰」を

生徒らに宣言し、その達成に懐疑的な教師らを説得し、幾多の困難な事案に率先して対応していった。そして、生徒に「和親」の心を説きつつ、勤労奉仕（プール建設など）・生徒自治会

結成・親の会結成など着々と推進した。また、生徒全員に運動競技を奨励し、血気盛んな行動を心身の鍛錬に向けさせた。さらに図書室を新設し、生徒の学力向上に努め、「荒れた

大島中学」を見事に再建し、その後の奄美の教育の礎を築いたのである。龍野先生が徳之島に帰省した際、亀津中学校教諭の永田世史氏（後の大和村教育長）に語るには



龍野定一先生
「郷土の先人に
学ぶ」より

私が大島中学校校長時代、卒業生で鹿児島以北に進学就職する者は早世が多く、台湾など（当時の台湾は日本領土）に渡る者は長寿が多かった。そこで全校生徒を動員してプールを造成し、水泳で寒さに負けない健康な体に鍛えようと考えたのだ。私は、鹿児島二中在学時代の5年間、ずっと首席だった。テストは全教科90点を下回することは一度たりともなかった。これは、勉学に励んだ賜物であるが、内実は、鹿児島から徳之島への帰省費や遊興費もままならず、勉学に励むしかなかった。

徳之島に「ヤンキチシキバン」という格言がある。これは、「薄いお粥に家の天井が映るほどの貧しい暮らしをしても、子どもには学問をさせ大成させよ。」

という意味である。「郷土の先人に学ぶ第4集」によれば、龍野定一兄弟が鹿児島二中時代に、徳之島の母親は山から薪を採集し、家々をまわり売り歩き、

細々と学費を送金していたとのこと。龍野先生の母親がまさに「ヤンキチシキバン」の模範であろう。その親の苦勞と愛情に勉学をもって報いたその熱き心情

が、やがて偉大な教育者となる基盤となったかと拝察する。そして、龍野先生が前述の永田氏に、「教育者は自分と魂の似ている者を弟子にする。」と語った

とのこと。それが下記に述べる奥田愛正先生のことと拝察する。



薪を売り、子どもの
学費にした。
(想像図)

おくだせんせい やまとそんおおだな おおだなじんじょうしょうがっこう そつぎょうご きゅうせいおおしまちゅうがく しんがく おおだなこうく はじ
奥田先生は1903年（明治36年）大和村大柵に生まれる。大柵尋常小学校を卒業後、旧制大島中学へ進学する。大柵校区から大島中学への進学は初め



愛正走り

かいきょ せいせきゆうしゅう せいせき ぱつぐん はくりよく おうえんだん たさい きょうぎ めいぶつぎょうじ
での快挙だった。大島中学でも成績優秀で、特に数学と理科の成績は抜群だった。また、大島中学の運動会は迫力の応援団や多彩な競技でにぎわう名物行事

あいしょうせんしゅ おおまた ちょうやく そうほう かいじょう あいしょうはし こうせい かた ぐさ
だった。そこで愛正選手は、大股で跳躍するような走法で会場をわかし、いつしか「愛正走り」と後世まで語り草になった。卒業後、はじめ医学を志すが、

じじょう とうきょうこうとうしはんがっこう み え けんりつ し ますいさんがっこう きょうし
家の事情で東京高等師範学校（後の東京教育大学）へ進学する。大正14年卒業後、三重県立志摩水産学校の教師となる。



うんめい てんかん さいけん あつ きょうどあい きょういくあい きょうし ひつよう たつのこうちよう
しかし、間もなく運命が大きく転換する。「荒れた大島中学」の再建のためには、熱い郷土愛・教育愛のある教師が必要だと考えた大島中学の龍野校長は、

ほごしゃだいひよう とも み え でむ あつ せつとく ちんしもっこう
保護者代表数名と共に、三重へ出向き、奥田先生に「愛正、島に帰って来い。二人で大島中学を再建しよう。」と熱く説得する。しかし、奥田先生は沈黙考し

しょうだく なんと み え はこ たいしょうじだい ながたひ りよひ そうとう
なかなか承諾しなかった。それでも龍野校長は何度も三重に足を運んだ。大正時代である。奄美から三重まではかなりの長旅で旅費も相当かかった。それで



生徒たちの問題行動

おとず さんこ れい ねつui てんきん
もあきらめず何度も訪れるこの「三顧の礼」の熱意に心動かされ、奥田先生は大正14年12月に大島中学に転勤する。

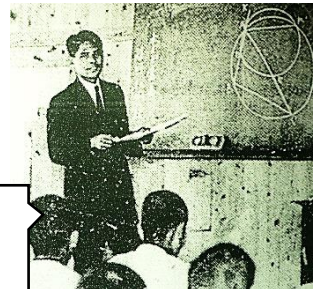
じゅぎょう めいりよう ねつき だれひとりしこ しんろしどうたんどう くがくせい よ よ じゅけんせい
奥田先生の授業は明瞭で熱意にあふれ、誰一人私語をする者はいなかった。そして、進路指導担当として、苦学生の多い中、夜な夜な受験生の家を

げきれい やしよく さ めいぶつぎょうじ たちがみえんえい おれ せんとう ねつけつせんせい
回り、激励し、夜食を差し入れすることもあった。また、大島中学名物行事の「立神遠泳」には、「俺に続け。」と先頭を泳いでいた。まさに熱血先生で、

そんけいしんらい こ げんくむしよばつ しんい
生徒たちは、尊敬信頼の気持ちを込めて、「愛正ミュー（ミューは兄の意味）」と呼んでいた。龍野校長の「厳訓無処罰」の深意は「処罰されることが無い

せきにん あつ きび くんどう い そつせんねつけつしどう すいしん
ように、教師が責任をもって、熱く厳しく訓導すること」である。その意を受け奥田先生は率先熱血指導を推進したのである。

奥田愛正先生
【提供：平田暉子氏】



ひんこうほうせい がくりよくゆうしゅう がくこう へんぼう
これにより、大島中学は品行方正で学力優秀な学校へと変貌していったのである。1946年（昭和21年）、奥田先生は同校の校長となる。

せんご べいぐんとうちか こんらんひんきゅう きしゆくしや しょくりようかくほ ほんそう きょういんようせいせんこうか せつち
当時、戦後の米軍統治下で混乱貧窮する苦学生たちのため、寄宿舎や食料確保に奔走し、また同校に教員養成専攻科を設置した。

しよくじにんご きょういくしよく ようしよく れきにん けんぎかいぎいん きょうど はってん こうけん
校長職辞任後も、教育職の要職を歴任し、また県議会議員として郷土の発展に貢献した。そして、大島農学校・大島中学・大島高校



ぜんこくそしき あんりようかい けつせい じんりよく しょうざい たんねん
卒業生の全国組織である「安陵会」結成に尽力する。卒業生の所在など奥田先生が一人で丹念に調べ上げたという。

受験生へ激励・遠泳大会先導

きょうどう ひぶん こうけつ じんかく きょうどあい ぼこうあい どうそうあい せいしん あんりようかいいん ぼこ
胸像の碑文に次の一文がある。「先生の高潔な人格と深い郷土愛、母校愛、同窓愛の精神は、安陵会員の誇りとするところである。」と。

奥田愛正先生のふるさと 大和村大柵



【参考文献「厳訓無処罰の教育」龍野定一（黎明書房） 「郷土の先人に学ぶ」（大島教育事務局） 「更生の大島中学」（県立奄美図書館所蔵）

付記【シマ（奄美）の歴史】戦後の教育復興のため命がけの密航

【この話は、平成 21 年（2009 年）10 月 21 日 NHK 放送の「南の島の先生 命がけの密航記」をもとに書かれています。】

戦後のアメリカ軍統治下で日本本土との交通を遮断された奄美群島は、孤立された絶望感と労働賃金の安さなど極度の貧困、そして食糧不足に輪をかけた3倍の物価高騰など、生きるのに劣悪な状況だった。それは、教育現場も同様だった。戦中のアメリカ軍の空襲で学校も焼かれ、新たに校舎を建てるにも資材がなく、ほとんどの学校が保護者らの手作りの粗末なかやぶき屋根の小屋だった。中には屋根も壁もあまりなく、机も椅子もノートもない「青空教室」の学校もあった。雨風の強い日は授業がないこともしばしばだった。



【当時の学校】写真：鹿児島県より

しかし、より深刻な問題なのは本土では新しい教育理念に基づいた新しい教科書や、小中高6・3・3制度による教育改革がなされていたが、それが奄美にはほとんど導入されない事だった。奄美の将来を担う子ども達への教育もままならない、正に民族存亡の危機だった。この状況を打破しようと、奄美の教育関係者たちは三原明大氏（当時・臨時北部南西諸島政庁文教部）を中心に日夜会合を持ち、「本土へ密航し、新しい教育を持ち帰る」ことを計画する。そこで自ら名乗りを上げ、選ばれたのが中学校教師の深佐源三（35歳）と小学校教師の森田忠光（26歳）だった。二人は仲間の手引きでアメリカ軍の厳しい監視をくぐり、アメリカ軍管理の船（金十丸）に船員として乗船する。



我ら教員代表を密航させて新しい教育制度と教科書を島に持ち帰らそう。代表は・・・



当時、奄美沖縄で通貨として使用されていたアメリカ軍票（B円・右下写真）は日本本土では使えないため、仲間や保護者らが黒砂糖や大島紬を出し合い、それを本土でお金に換えて東京の国会や文部省に行くための資金にすることにした。黒砂糖は薪の中に隠し入れた。黒砂糖も大島紬も本土で高く売れるとの計算計画だった。



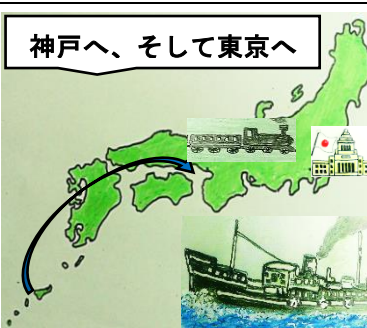
B円

追記【シマ（奄美）の歴史」戦後の教育復興のため命がけの密航

昭和 23 年（1948 年）6 月、名瀬港を無事に 出 港 したが、やがて 絶 体 絶 命 の危機が迫る。神戸港に停泊しアメリカ軍の 検査が始まる。密航密輸がばれたら、逮捕され品物は 没 収 されてしまう。二人は苦渋の策で黒砂糖を海に投げ捨てる。大島 紬は幾重にも重ね着をして何とか持ち出すことができた。しかし、大島紬も上 陸 後に神戸の各 店 で足元を見られ、安く買いた たかれたあげく、残りも詐欺・盗 難 されてしまう。その 窮 地 を救ったのが本土 在 住 の奄美出身者たちだった。当時、本土で 暮らす奄美の出身者は、奄美の 人 口 とほぼ同じ規模。奄美が本土と分離されたことで、故 郷 を訪ねることも特別な許可（パスポート）がなければできなくなっていた。島の 窮 状 に 心 痛めていた彼らが資金をやりくりし、7 月に目的地の東京・文 部 省 に 到 着 させたのである。

そして二人は、戦後の新しい教科書や教育方 針 を奄美に持ち帰る。ガリ版（当時の手書き手刷りの 印刷 法）で刷り増し、島 中 の学校に配り歩く。その後、教師たちは新しい 教 育 理念や 6・3・3 の教育 制度を奄美に根付かせようと 奮 闘 する。

一方で、アメリカ軍統治下で奄美の人々の暮らしはますます 困 窮 し、子ども 達も 労 働 者 としてかり出され、学校に出来ない子ども達が増えていった。この 状 況 で教師たちは「子ども達に自主性を説くならば、まず、自分たちが自主的に声をあげよう。」と、 復 帰 運動に 率 先 奮 闘 していくのである。



神戸へ、そして東京へ



黒砂糖を海に捨てる



大島紬盗まれる



新しい教科書



ガリ版で印刷し、子どもたちに配る



奄美市名瀬の赤崎公園区域内に「教育日本復帰之碑」がある。奄美群島日本復帰よりいち早く昭和 23 年 4 月（1948 年）に『教育復興』がなされたことを記念して平成 5 年（1993 年）に 建 立 されている。毎年 8 月には奄美の 退 職 教 職 員 で 結 成 する 教 友 会（令和 6 年会員は 105 人）で、碑の周 辺 の美化作業を行い、先人らの 業 績 を 偲 び 継 承 している。

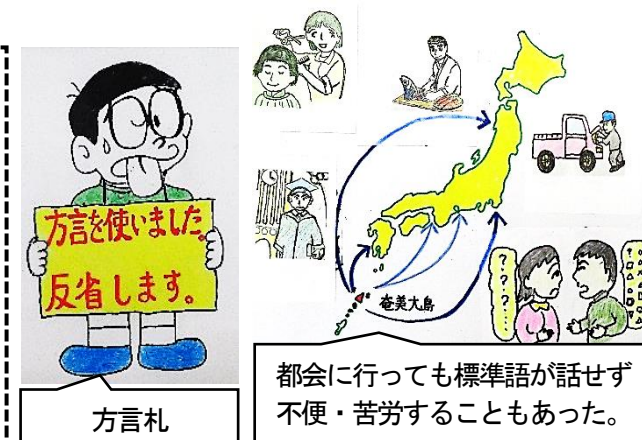


付記【シマ（奄美）の歴史】奄美方言の歴史と音韻の特徴

【本論は「奄美大島の方言」について編集者が大学生時代に学んだことの紹介です。専門書ではありませんが、少しでも参考になれば幸いです。】

むかし、奄美の学校で方言を使うと、右の図のような札を下げられ、罰として掃除当番などをさせられました。どうしてこんなことをしたのでしょうか。その理由はいろいろありますが、よく語られるのが、次の話です。

むかし、奄美には今のようにラジオやテレビはなく、標準語を学ぶ機会も、標準語を話せる人も少なく、人々の会話はほとんど奄美方言だった。そこで進学や就職のため奄美を離れて鹿児島以北に行っても、標準語での会話がうまくできず、不便な事や恥ずかしい思いをする人が多かった。そのため、「方言を使わずに標準語で話しましょう。」との運動になったのですが、それが極端になりすぎて、いつしか、「奄美方言は日本語とは言えず、変な劣った言葉だ。」と、とんでもない間違った認識になった。・・・と言うのです、



奄美方言は日本語とは言えないのでしょうか。文法（言葉の並び）から考えてみましょう。「自分は男である」ことを名乗る時、標準語も奄美方言も図のような言い方になります。言葉の並びが同じですね。ところが、これを英語で言うと、言葉の並びが全く違います。ですから、奄美方言は日本語だと言えるのです。

日本全体の方言は、その発音などから、奄美より北の「日本本土地方言」と奄美から沖縄の「琉球方言」に大きく分けられます。奄美方言はこの琉球方言の仲間です。

奄美方言はさらに島ごとに分けられますが、ここでは奄美大島の方言を中心に紹介します。標準語が図のように5つの母音であるのに対し、奄美大島方言には図のように7つの母音があります。「I」と「E」を中舌母音と言います。「い・え」を発音する際に舌先を上あごに巻き引く感じで発音します。

奄美方言は日本語か？

文法（言葉の並び）から考えてみよう。

（標準語）ぼく は おとこ です。

（奄美方言）わん や いんが ど。

（英語）I AM A BOY
ぼくは です おとこ

奄美方言は文法が日本標準語と同じであり、日本語です。

日本本土地方言

奄美大島

琉球方言

喜界島
徳之島
沖永良部島
与那国島
宮古島
石垣島
与那国島

日本方言

- 日本本土地方言
- 琉球方言
 - 奄美・沖縄方言
 - 喜界方言
 - 大島本島方言
 - 徳之島方言
 - 沖永良部方言
 - 与那国方言
 - 沖縄本島方言
 - 宮古・八重山方言
 - 与那国方言

奄美方言の特徴

母音が7つある。中舌母音 I と E

（標準語） A I U E O
ア イ ウ エ オ

（奄美方言） A I I̥ U E E̥ O
ア イ ウ エ オ

（カ行） KA KI K̥I KU KE K̥E KO

（マ行） MA MI M̥I MU ME M̥E MO

では、奄美大島の7つの母音が標準語とどのように対応しているか見てみましょう。

標準語の「O」母音と、奄美方言の「U」母音が対応しています。

標準語の「E」母音と、奄美方言の中舌母音「I」が対応しています。

標準語の連母音（母音がAEやAIのように続くこと）と、奄美方言の中舌母音「E」が対応しています。

奄美方言の特徴

標準語のO母音と、奄美方言のU母音が対応する。

標準語		奄美方言
(鳥) TORI	⇔	TURI
(言葉) KOTOBA	⇔	KUTUBA
(喉) NODO	⇔	NUDU

奄美方言の特徴

標準語のE母音と、奄美方言のI母音が対応する。

標準語		奄美方言
(目) ME	⇔	MĪ
(根) NE	⇔	NĪ
(手) TE	⇔	TĪ

奄美方言の特徴

標準語の連母音と、奄美方言のE母音が対応する。

標準語		奄美方言
(前) MAE	⇔	MĒ
(台風) TAIHU	⇔	TĒ:HU
(考え) KANGAE	⇔	KANGĒ

奄美方言には、現代ではほとんど使われなくなった「Y I」や「WU」の発音があります。これも大きな特徴です。下記はその例です。

「Y I N」(縁側) ⇔ 「I N」(犬)

「Y I」(柄) ⇔ 「I」(胃)

「WUTU」(夫) ⇔ 「UTU」(音)

「WUZI」(叔父) ⇔ 「UZI」(蛆)

【奄美方言の「はげー」は便利な言葉】

◎驚いた時も「はげー」

◎嬉しい時も「はげー」

◎悔しい時も「はげー」

◎悲しい時も「はげー」

◎怒った時も「はげー」

◎不思議な時も「はげー」

◎あきれた時も「はげー」

◎慌てふためく時は「はげはげはげー」



奄美方言の発音の特徴として、喉頭破裂音「？」があります。これは、喉を詰まらせて続く言葉を一気に発音するのですが、この喉頭破裂音があるか無いかで発音はもちろん、

言葉の意味も違ってきます。さらに、奄美方言の特徴として、古い時代の言葉が多く残っていること、古い時代の発音「P」音が残っていることが挙げられます。古くは、

「妻」の事を「刀自(TOZI)」と言っていましたが、奄美方言では「O⇒U」により「TUZI(とうじ)」と発音され残っています。また、太古の時代は、現代の「H」音は

「P」音でしたが、それが奄美大島最北端の笠利町佐仁と、奄美群島最南端の与論島に残されているのです。

奄美方言の特徴

喉頭破裂音？(グロタルストップ)がある。

(豚) ?WA	⇔	WA (輪)
(おぼえ) ?YA	⇔	YA (家)
(魚) ?YU	⇔	YU (湯)
(馬) ?MA	⇔	MA (間)
(稲) ?NI	⇔	NI (荷)

奄美方言の特徴

古い時代の言葉が多く残っている。

現代標準語	古い時代の言葉	奄美方言
妻	刀自 TOZI	TUZI
去年	こそ KOZO	KUZU
あご	おとがい OTOGAI	UTUGĒ
わたし	我 WA	WAN

奄美方言の特徴

古い時代の八行P音の言葉が残っている。

現代標準語 HA HI HU HE HO

古い時代の言葉 PA PI PU PE PO

現代標準語	笠利町佐仁方言	与論町茶花方言
葉 HA	PA:	PA:
花 HANA	PANA	PANA
舟 HUNE	PUNI	PUNI

以上、奄美方言は言葉の並びや、発音がある決まりで標準語と対応すること、古い時代の言葉が多く残っていることからして、決して変な劣った言葉ではなく、日本語の歴史を研究する上で貴重な文化遺産と言えるでしょう。私たちは、このすばらしい文化遺産を誇りに語り継ぎたいものです。

【参考文献一例】

「琉球方言音韻の研究」中本正智(法政大学出版局)

「琉球方言」(琉球大学方言研究クラブ)

「奄美方言分類辞典」長田須磨(笠岡書院)

「与論方言集」菊千代(与論民俗村)

「奄美に生きる日本古代文化」金久正(至言社)